

Title	ドナルド・リード著 ピータールー：虐殺とその背景
Sub Title	Donald Read; Peterloo, the 'massacre' and its background
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.5 (1959. 5) ,p.469(83)- 476(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19590501-0083
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590501-0083">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590501-0083</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

しつくさるべき対象を提供したといういみで、著者の労を多としたい。

第二に、資本主義の構造変化と機会主義、修正主義というテーマを追求するに当って、一八九四年のフランクフルト党大会を分析の出発にすえたこと、機会主義の抬頭の一定の時点に、ベルンシュタインの修正理論が『諸問題』『諸前提』の二著にまとめられ、これがどのように、シュトゥットガルト党大会(一八九八年)、ハノーヴァー党大会(一八九〇年)で問題にされたかを通して、修正理論をむかえる当時の社会民主党の実態を明らかにしようとする事、および、ベルンシュタインが修正主義理論を発表した時点において、イギリス、ドイツの労働運動、社会政策の実態を明らかにすることによって、かれの楽観の見透しと正に逆な事実を論証し、これを通じてベルンシュタインの党派の性質にきりこもうとするすめ方、の三点を積極的に評価したい。

## 六

他面、私はつぎの諸点に、みたまないものを感じた。

第一に、——これが根本的なことだが——著者の問題意識は何かということである。

著者はこの本を通じて、カウツキーの批判にくらべ、ルクセンブルグおよびツェトキンの批判が、原則的で一貫性をもっていたことを説く事によって、機会主義・修正主義に対する批判の有効性を、

そのイデオロギッシュな鋭さに負わせているように思われる。「ベルンシュタイン一派を党から追放してさえいたら」といった口調はこれと無関係には考えられない。私は、修正主義の問題が鋭くイデオロギッシュな側面をもっていることを否定しないし、また、共産党の出現が世界的な必然として考えられている以上、当時の社会民主党の指導部の折衷的態度は、冷静な評価を加えらるべきであることに異存はない。しかし、今日、機会主義・修正主義をあらためて研究の対象にしたがら、レーニンの定式の確認にとどまり、イデオロギー闘争の重視と、それら分子の断乎とした追放だけを歴史的教訓としてつかもうとするならば、やはりその問題意識そのものを問わぬわけにはいかない。この本が、論証を通じて定式がうきぼりになるといふより、定式に論証がよりかかっている甘さと別のものではない。事の性質が鋭くイデオロギッシュであればあるほど、高い問題意識とみずみずしい現実感覚が要求されるのであり、強じんな論証力によってのみ「政治」によりかからない学問の存在を主張しうるのだと思う。

残念ながら、著者は、現在の切実な問題、即ち現段階における世界資本主義の法則性の解明、社会主義移行についての理論的究明、国家理論の深化——民主主義的諸制度の評価と結合して——、社会主義運動と労働運動、民族運動の關係、戦争についての問題との関連性を念頭においているとはいえない。これが一ばんみたまない点でもある。

第二に、個人の評価に機械的なものを感じさせる。即ち、善玉、悪玉の類型化がかんじられる。それには評価の基準の理論的確定と、個人の活動が、主体的側面からも具体的、多面的に検討されなければならぬと思う。

第三に、この本では、機会主義者、修正主義者、労働貴族(組合官僚)がそれぞれのような共通性と差別性のうえにたち、どのようにからみあいながら、それぞれ流れをつくっていったかが明確でない。Gayのように、ベルンシュタインの中に理論的性格と節操をみ、機会主義者と労働組合幹部に、その場しのぎと無節操をみるのは論外としても、それぞれの流れは、具体的に究明される必要がある。

(正田 庄次郎)

ドナルド・リード著

『ピーターラー——虐殺とその背景』

(Donald Read; Peterloo, The 'Massacre' and its Background, 1958)

イギリスにおける社会運動史の研究は、ここ数年来、いちじるし

書評及び紹介

八三 (四六九)

い発展をとげつつあるようである。われわれはわずかに、海外出版物のカタログを通じてその一端をうかがい知るにすぎないが、たとえばその研究動向のもっとも大きな特徴として、つぎのような諸点があげられよう。(一)ウェップやコール等のいわゆる古典的通史的な研究から進んで、個別的なオリジナルな研究が出現しつつあること、(二)従来のフェビアン主義やホイッグ史観とは別に、マルクス主義的な立場から接近しようとする若い人々が登場しつつあること、(三)今迄かえりみられなかった新しい資料の発掘によって、従来の研究の間隙を充たそうとする真摯な努力の成果があらわれつつあることなどである。マルクス主義の立場からする研究については、筆者は今迄しばしばふれてきた。ここにとりあげた著作は、十九世紀初頭、イギリス労働運動史上無視することのできない大事件「ピーターラーの虐殺」を対象としたものであり、その明確な問題意識や透徹した分析視角はもとより、まれにみる厳密な資料的把握の上に立っている点からも、注目すべき力作であるといえよう。また、これより少し前に、ホワイトの「ウォーターラーからピーターラーへ」(R. J. White; Waterloo to Peterloo, 1957)もだが、同じ時期をとりあつかう研究が、ほぼ時を同じくして、現われたことは興味深い。ホワイトは、ケンブリッジ大学の歴史学の講師で、ダウニング・カレッジのフェローをしている。ここにとりあげた著作の著者リードは、リーズ大学の歴史学の助講師(Assistant Lecturer)である。ホワイトの著作は、ホイッグ的史観の代表者であり、英国史

学界の泰斗であるジョージ・マコーレー・トレヴェリアン (George Macaulay Trevelyan) に献けられている点は、この書の性格を暗示している。

一八一九年八月一日、マンチェスターの聖ピーター寺院広場に議会改革と穀物法および綿輸入税の撤廃などを要求して、集まった大衆の平和的な示威運動に加えられた官憲の暴行と虐殺、そしてその後のこれにたいする世論のはげしい抗議運動——いわゆる「ピーターラーの虐殺」もしくは「ピーターラー事件」——については、従来大抵の歴史書や労働運動史の研究書が、その重要性を指摘しているにもかかわらず、せいぜい表面的な叙述か、甚だしい場合には、二、三行ですまされることも少なくなかった。これは、今迄この事件を歴史上のたんなる「エピソード」として過小評価する傾向が、一般的に見られた結果であった。しかし、フランス革命が英国に大きな影響をあたえはじめた十八世紀の末期から、一八五〇年代、チャーチスト運動が没落した頃までの黎明期の労働運動の歴史を考察するとき、この事件は、ただたんに、イギリス政治史の上に記録されるにとどまる一事件としてではなく、当時の産業的社会的経済的な複雑な関係とさまざまな矛盾、とくに産業革命の過程を通じてひきおこされる新旧両勢力の階級的な利害の対立と葛藤の激化を鮮やかに反映しているといえるのではないだろうか。

リードの労作は、従来ともすれば閑却されてきたこの事件の重要な背後関係、この運動に実際に参加した大衆の階層関係、これらの

人々をひきいる指導者層の立場の相違、宗教的な派閥間の抗争、さらにはこの大衆的な労働運動にたいするマンチェスターの治安判事および内務省の態度、この両者の見解のくいちがいがいかに照明をあてることによつて、この事件の全貌を浮き彫りにし、その歴史的な意義を強調している。一方、ホワイトの著作は、「ウォーターラーからピーターラーへ」と題されていることから明らかなように、とくにピーターラー事件だけを対象としてとりあつたものではない。ナポレオン戦争が終つた一八一五年前後から一八一九年までのイギリス社会の変貌を叙述しながら、急進主義運動の一点としてピーターラー事件にふれているにすぎない。われわれはこの二つの業績において、何よりもその歴史観の点で、つぎに問題の把握の仕方の方でいちじるしい対照と見解の差異を見出すのであるが、ここではリードの著作だけを検討するにとどめなければならない。

二

この書は四部からなり、第一部経済的社会的背景、第二部政治的背景、第三部ピーターラーの虐殺、第四部ピーターラーの余波となつてゐる。冒頭の第一章では、「一八一九年のマンチェスター」と題して、十九世紀初頭のマンチェスターの生活を描き、産業革命の波瀾にゆられながらも、旧態依然たる地方政治、住民の保守的な精神状態のなかにあつて、綿工業のみがこの都市を活気づけていた唯一の産業であつたことをつぎのようになる。「精神状態では、こ

の町は非常におくれている……。実業と金を儲けることが、この時期の典型的なマンチェスターの人々を夢中にさせた仕事であつた……。うすよごれた町、古くさい地方政治、教養の欠如——これはすべて大して重要ではなかつた。ビジネスこそ唯一の職業であり、利潤こそ大きな目標なのだ」と(三一—四頁)。

リードは第二章において、綿業都市としてのマンチェスターにおいて重要な階級的地位をしめる綿業親方 (the cotton master) と綿業労働者 (the cotton operatives) の分析に入る。十八世紀末期のマンチェスターにおいては、綿業親方はまだ一握りの商人資本の支配下にあり、商人たちが、製造業者としての親方たちに敵対心をもっていたのは(六頁)、勃興する産業資本の力をおそれたからにはかならない。だが、商人と綿業親方との対立が、政治的な信条として、それぞれトリーとホイッグという相反する党派を支持せしめたにしても、親方は、政治に熱烈な関心を抱いたわけではなく、むしろ彼らの態度は、「漠然たる保守的な冷淡さ」であり、現実にはこれは、ウェストミンスターにおけるトリー政府およびマンチェスターにおけるトリー寡頭支配を容認することを意味した。「多くの親方は、この町に、政治的な感情を昂めることは、下層の人々をして不安と騷擾にかりたてるのではないかとおそれた」(八頁)のである。すなわちここに親方に対立する階層としての綿業労働者の存在がクローズ・アップされるわけである。新興親方層は、反動的な地主的権力の重圧や商人資本の支配にはげしく反抗

し、とりわけ、穀物法や輸入綿花に対する課税には猛烈に反対しながらも、レッセ・フェールの信奉者である以上、下層綿業労働者の要求としての最低賃金法や工場法運動には、強い不満と懐疑を抱くに至る。

一方、綿業労働者は、当時のランカシア地方では、工場綿業労働者 (the factory spinning workers) と家内手織工 (the domestic handloom weaver) という二つのグループにわかれていた。イギリス産業革命の過程が示すように、一八一九年頃は、力織機工場で働く織工の数は相対的に少なく、織物は、もっぱら手織工によつて織られていた。この手織工こそ、実はピーターラー事件に重大な役割を果すわけであるが、とくに一八一七年頃から一八一九年にかけて絶頂に達した恐慌によつて、賃金はいちじるしくおしきげられ、失業者や復員軍人としてとくにアイルランド人の手織業への集中は、その状態を、もっともみじめなものとしたのであつた。こうした結果、一八一七年困窮の救済と議会改革をもとめて、「毛布党の行進」(The March of Blanketers) が手織工によつて試みられた。議会改革の要求が、腐敗したトリー党の支配にたいする非難から発したものである以上、急進主義運動の激化はまた国教派と非国教派の対立という形をとつてあらわれ、階級的な利害の対立を一層複雑ならしめたのである。

第二部の政治的背景として、著者は、手織工を主勢力とする改革運動を率いる指導者を、つぎの二つの範疇にわけた。(一)労働者階級

の急進主義者 (The Working-class Radicals)。(3) 中産階級の急進主義者 (The Middle-class Radicals) であつて、これらの急進主義者の運動にたいして、これを阻止し、妨害してトーリーの支配を確保しようとする保守主義者を、王党派 (The Loyalists) と呼んでいる。まず第一に、労働者階級の急進主義者として、著者は、ヘンリー・ハント (Henry Hunt)、ジョセフ・ジョンソン (Joseph Johnson)、ジョン・ナイト (John Knight)、サミュエル・バムフォード (Samuel Bamford)、ヘアリー (Healey)、サクスタン (J. T. Saxton)、ジョセフ・ハットン (Joseph Harrison)、チャールズ・ウォルズリー (Sir Charles Wolsey) などの人々をあげているが、これらの人々は、ハントやバムフォードのように比較的名前の知られた指導者もあり、またそうでない者もあり、またその活動の範囲についても、全国的もしくは地方的というように、それぞれ異なつた面を有しているが、彼らが、労働者階級の急進主義者として呼ばれるためには、何かしら共通の要素をそなえていなければならぬ。いうまでもなく、そのためには急進主義者からはじめなければならぬのだが、著者はこれについては何もふれていない。急進主義とは、ブルジョア民主主義のものにはかならないが、では労働者階級の急進主義者とは何か。けだし、もっとも具体的にその出身階層をみれば、ハントはウィルトシアのヨーマンの生まれであり、ジョンソンはマンチェスターの小規模なブラシ製造業者、ナイトはやはりマンチェスターの小規模な綿製造業者であり、自叙伝

集められた資金をもつて、講演や読書のための会場がつけられ、子供はもちろん成人のための読み、書きおよび数学の授業が行なわれたのであつた(四八頁)。

ストックポートにおけるハリソンの団体に刺戟されて、ハルにも同じような団体がおこり、マンチェスターをこえてはるかカーライル、ニューキャッスル、グラスゴウ、ロンドンおよびバーミンガムにまでも及んだ。そしてストックポート組合の規約は、全国の急進主義運動を指導するに至つた(五〇頁)。ピータールー事件の中心地マンチェスターに、最初にこの種の組合が出来たのがいつであるかは明らかではないが、愛国的組合 (the Patriotic Union Society) と呼ばれたものを正しくそれで、ピータールーの大会のために、ハントを招待した団体であつたといわれる。マンチェスターに当時、ナイトがその書記であつたといわれる。マンチェスターには、このハントの影響をうけた穩健な団体のほかに、ウォーカー (W. C. Walker) 等によつて率いられる別のきわめて急進的な団体が競争的に存在しており、ピータールー事件の頃、六〇〇〇人の会員を擁していたといわれ、相当な勢力をもつてたと考えられる。

ユニオン・ソサイエティは、成人男子のための政治的啓蒙機関であつたばかりでなく、一八一九年六月の終りには、婦人のための団体がまずブラッグバリーで建設され、つづいてストックポートおよびマンチェスターにおよび、さらに広汎な地域に及んだが、この婦人団体の目的は、「子供たちに急進的な理論を注入する」ことであ

#### 書評及び紹介

で有名なバムフォードは、マンチェスターの近隣ミドルトンの織工であつた。彼らの特徴づけるもっとも重要な点は、増大する資本制生産の発展のなかで、下向的没落的な線を辿る小生産者ないし小企業家的性格であろう。そこでこそはじめて普通選挙権、年一回の議会開会および穀物法の撤廃は、彼ら自身の切実な要求であつたばかりでなく、それは何よりも、低賃金、高物価および失業という経済的困難にたいする抗議、そして基本的な政治的権利の獲得のための労働者階級の闘いと一致したのである(四〇頁)。著者はここで、急進主義者の団体、ハンペン・クラブ (Hampten Club) と毛布党の運動のうち、一八一八年ストックポートにはじめて建設され、のちに各地に建設されてピータールー事件に重要な役割を果したユニオン・ソサイエティ (Union Society) という組織について論じている。「人間的な幸福の増進のためのストックポート組合」 (The Stockport Union for the Promotion of Human Happiness) という野心的なこの最初のユニオン・ソサイエティは、さきこのべた非国教派の急進的な説教師ジョセフ・ハリソンによつて、その規約が作成された。それによれば、町は一二の地区にわかれ、各地区では、秘密投票によつて二名が常任委員会に選出され、この半分の人員が三ヶ月毎にかり、またこのなから、会長、副会長、書記および会計掛りが選ばれた。各地区の支部は支部長を中心に二人の会員から成り、週一回会合することになっており、週一ペニーを会費として支払つていた。こうして会員たちが何をしたかといへば、

つた(五三頁)。急進主義運動が昂まり、その影響が、男子労働者から婦人そしてさらに子供にまで浸透し、とくにマンチェスターでは、子供のための組合日曜学校 (Union Sunday School) が開かれるようになる、官憲がこれにたいして嚴重な警戒を示すようになったことはいうまでもない。かくして手織工を中心とするもっとも重要な急進的な集會が各地に開催されたのであつて、ピータールーの虐殺の年、一八一九年一月にはオールダムで、一月一日にはマンチェスターで、二月一日にはストックポートで、六月一日にはアシントンで、六月二日には再びマンチェスターで、やはり六月二日には再びストックポートで、また七月二日にはロッチデールで、それぞれ同じような集會が催され、徹底的な議會改革による選挙法改正と穀物法および綿輸入税の撤廃を決議した。一方、マンチェスターでは、指導的な急進主義の新聞「マンチェスター・オブザーヴァー」 (The Manchester Observer) が発刊され、一八一九年の夏には週三〇〇〇ないし四〇〇〇部の売れゆきを示していた(五五頁)。かくして一八一九年八月一日のピータールーの大示威運動への途は、急速にはき清められたのであつた。ここで注意しなければならぬことは、労働者階級の急進主義者を指導者とするこの運動は、多くは職人的性格を完全に脱却できない手織工であつたという事実であろう。産業上の困窮の救済のために、議會制度上の改革のみが必要であるとする点だけが不当に強調され、しかも平和的な示威運動や請願によつて獲得できるという戦術は、この急進主

義運動を特徴づけるものであったろう。

つぎに著者リードは、「労働者階級の急進主義者」に対して競合的な関係に立つ「中産階級の急進主義者」についての分析にすすむ。著者によれば、一八一九年当時、マンチェスターの中産階級の急進主義者は、労働者階級の急進主義者の運動ほど広はんな組織網をばっておらず、「少数のしかも確固たる一組の人々」(a small but determined band)のグループ以上のものを出なかつたし、「彼らの多くの者は、宗教的には非国教派とくにユニテリアンで、綿業に關係し、ほとんどが、マンチェスターの生れではなかつた」(五六頁)。著者は、中産階級の急進主義者即ブルジョア急進主義者の指導者としてジョン・テラー(John Edward Taylor)、リチャード・ポッター(Richard Potter)、ジョン・シャトルワース(John Shuttleworth)、アーチボルト・ブレンデニス(Archibald Prentice)の四人をあげているが、彼らはいずれも綿業に關係ある富裕な商人で、そのイデオロギーは、ベンサム(Jeremy Bentham)の功利主義であつたことを指摘する。ブルジョア急進主義者としての彼らの政策は、二つの異なつた階層を志向していたこと、つまり一方において綿業親方、他方綿業労働者(the cotton operatives)の両方にその支持者をえようとしていたことは興味深い。新興ブルジョアジーのイデオログとしての彼らは、自由貿易主義の貫徹、従つて地主的な「穀物法の撤廃をもつて、親方にも労働者にも非常な利益であり、自由貿易こそ、両階級にこの上ない繁栄をもたらす

つぎに第三部においては、ピータールー事件そのものの展開について、著者は、十八世紀末以来の急進主義運動を意識しながらきわめて詳細に分析している。われわれは、もはやこれについてのべる余裕をもたない。ただ著者の強調していると思われる点を略説するならば、まず第一に、セント・ピーター寺院広場での手織工の平和的な示威運動——ハントによれば十五万人、だが実際には六万人であつたといわれ、そのなかには婦人や子供もふくまれていた——を頂点とするマンチェスターの急進主義運動において、内務省当局とマンチェスターの治安判事との間の客観的な状況に対する判断の相違であつた。マンチェスターの治安判事は、多く反動的なハイ・トリーの牧師や地主などの反動的な思想の持主によつてしめられたので、急進主義者の行動に脅威を感じ、ともすれば、軍隊の力によつてこれを鎮圧しようとする傾向がみられたが、内務当局とくにシドマウス卿の如きは、これに警告をあたえ、慎重な態度を要求したほどであつた(一一一—一二〇頁)。これについて著者は、つぎのようにいう。「しかしながら、大会が開かれるやいなや、治安判事はもはや、法務官の詳細にして生ぬるい忠告に縛られなくなった。彼らは更に多くを、彼ら自身の判断にまかせられたのだ……。不吉にも、八月三日の王党派の新聞『マンチェスター・マーキュリー』は、つぎのようなことを報告した。チェシアの治安判事は、決意をもつて行動し、従つて、あらゆる叛逆的な集会を、彼らが集まるとすく、抑圧する決心を固めた。ピ、タ、ル、の虐殺をつくり出したのは、

書評及び紹介

だろりと主張した」(六八頁)。この主張から彼らは、労働者の困窮を緩和する途を、植民地への移民にもとめたことは、彼らの政策の不徹底さを示している。重要なことは、彼らの労働者階級の急進主義者にたいする關係であろう。彼らがハント等の労働者階級の急進主義者にたいして、個人的な理由からも反感を抱いており、非友好的であつたことは明らかであるが、とくに彼らの理想は、ピータールーの規模の運動ではなく、静かな合理的な議論であつた」(七一頁)。

こうして両者は、いわば競合關係を保ちながら、ピータールー事件をむかえるのであるが、著者はさらに、この急進派に對立するものとして、王党派をあげている。著者によれば、ピータールーで官憲の行動を支持したマンチェスターの保守派は、二つのグループにわけられる。一方はハイ・トリー(High Tory)、他方はピット主義者であつて、前者は、教会および国家における現状維持を、ひたすら願ひ、他方は、綿業経営者として、より自由な貿易と、議會にマンチェスターの商業上の利益を擁護する代表者をおくるために、制限された形の議會改革を支持していた(七四頁)。実はこの両者の間の利害の對立、たとえば治安判事の大部分が、産業資本家としてのピット主義者ではなく、大部は地主、牧師などのハイ・トリー派によつて占められ、マンチェスターの権力機構が、保守派のなかでもっとも反動的な人々に掌握されていたといふことを、ピータールー事件を悲劇にした大きな原因のひとつであつた。

内務省によつて唱へられた政策ではなく、この政策だつたのだ」と(一二二頁、傍点筆者)。

マンチェスターの治安判事と内務省との危機感の相違がどこからおこつたか。けだしそれは、その当時のマンチェスターを中心とする産業地帯の政治的矛盾と經濟的危機の感じ方において、その地域に密接な利害を感じる保守派の恐怖と動揺が、中央政府の支配者よりも、一層深刻且つ直接的であつたからではなかつたらうか。この点については、著者はあまりふれていない。

「平等選挙か死か!」「團結せよしかも自由であれ!」「腐敗選挙区の廢止!」「代表なき課税は不正であり専制的である!」「穀物法反対をして普通選挙!」これらのスローガンを掲げて一八一九年八月一六日、マンチェスターの聖ピーター寺院広場に集まつた大衆は、治安判事の指令によつて出動させられた騎馬義勇兵によつて蹴散らされ、暴行を加えられ、虐殺された。指導者ヘンリー・ハントとともに婦人をふくむ一人が罪人として捕えられ、数百人が負傷し、一人が殺された。そのほか三〇人以上が投獄されたといわれる(一三九—一四〇頁)。マンチェスターにおこつた未曾有のこの大惨事にたいして、各階層はどのような反応を示したか。著者は第四部において、労働者階級の急進主義者、中産階級の急進主義者、綿業親方層、治安判事および政府が、それぞれどのような衝撃をうけ、またどのようなしてこれに對処し、この事件を自己の深刻な教訓たらしめたか、この点について論じている。筆者がこれについてふれる

ことは、紙面の都合上ゆるされないので、最後にこの書の結論と筆者の見解とをのべて、不十分な紹介を終わりたいと思う。著者は結論的にのべている。

「二世代後、そのピーターラーの名前は、チャーチスト運動の指導者によって、たえず呼び出された。その闘いは、非常に多くの点で、ピーターラーの急進主義者のそれに似かよっていた。一八三八年、マンチェスターの近くの最初のチャーチスト大会において、ピーターラーの旗は、いま一度行列のなかにかかげられ、そして一八四二年には、ヘンリー・ハントにたいするマンチェスターの追憶の礎石は、チャーチストの指導者フーガス・オコンナーによってすえられたのである」(二〇六頁)。

本書を読んでもっとも印象づけられたことは、ピーターラー事件の背後に伏在する階級的分析の周到さであろう。本書は、この点において従来の労働運動史や社会経済史もしくは社会思想史の研究者

が閉却していた一事件に光をあてることによってこれらの分野に貴重な貢献をなしたことは特筆されなければならない。と同時に、本書のもつ最大の欠点は、ピーターラー事件そのものに焦点を絞りすぎた結果、その前後の勤労者大衆の運動、たとえば、ラダイン運動やチャーチスト運動との関連のなかで、この事件をどのようにに評価するか、社会運動の歴史の上でこの事件をいかに意味づけるか、これらの点についてそのとりあつかいはなほ不十分であることがあげられなければならない。このすぐれて実証的な研究によって、わが国のイギリス社会史研究が裨益するところ、きわめて大きいことを筆者は信じて疑わない。——一九五九・三・一三——(1) これについては、杉山忠平氏「ピーターラーの事件——ラダインズムからチャーチズムへ——歴史の教訓」(経済評論、三四年一月号)が、くわしくふれているので、参照されたい。

(飯田 鼎)

経済学関係文献目録

(昭和三十四年二月刊)

経済理論・思想・学説史

- \*「資本論」と日本 鈴木鴻一郎著 A 5
- 二〇九頁 二六〇円 (弘文堂)
- \*線型計画と経済分析 1 ドーファン、サミュエルソン、ソロ編 安井琢磨、福岡正夫、渡部経彦、小山昭雄訳 A 5 二六九頁 四八〇円 (岩波書店)
- \*戦後景気循環論—統現代資本主義と恐慌—名和猷三、玉井竜象編 B 6 三二七頁 三六〇円 (合同出版社)
- \*近代経済学入門 (現代教養文庫) エリック・ロール著 白石四郎、吉田忠雄訳 A 6 二九八頁 一三〇円 (社会思想研究会 出版部)
- \*現代資本主義講座 4 国民生活と諸階級 有沢広巳編 A 5 二七一頁 三七〇円

経済学関係文献目録

(東洋経済新報社)

- \*アメリカ経済の構造—産業連関分析の理論と実際— W・W・レオンチェフ著 山田勇、家本秀太郎訳 A 5 二四四頁 五八〇円 (東洋経済新報社)
- \*講座恐慌論 4 恐慌史 井汲卓一編 A 5 二八二頁 四二〇円 (東洋経済新報社)
- \*マルクス体系の再検討—マルクスとマルクス主義— アンドレ・ビエートル著 岡田純一訳 A 5 三四一頁 五八〇円 (理想社)
- \*利子つき資本—信用理論研究序説— 飯田繁著 A 5 四七二頁 九八〇円 (有斐閣)
- \*勢力論 高田保馬著 A 5 三七〇頁 六〇〇円 (有斐閣)

統計・数学

- \*統計の理論 第一分冊 創始者たち ラン スロット・ポグベン著 馬場吉行、平田重行訳 A 5 一六五頁 三八〇円 (日本評論新社)

経済史・社会史・政治史

- \*明治史研究叢書第二期 2 近代産業の生成 明治史料研究連絡会編 B 6 二三五頁 二五〇円 (御茶の水書房)
- \*歴史地理講座 1 総論・ヨーロッパ 森鹿三、織田武雄編 A 5 三七六頁 七五〇円 (朝倉書店)
- \*明治維新史研究講座 5 歴史学研究会編 A 5 三一七頁 四五〇円 (平凡社)
- \*畿内歴史地理研究 藤岡謙二郎著 A 5 三一八頁 八〇〇円 (日本科学社)
- \*東大教養西洋史 3 近代社会の成立 中屋健一編 A 5 一八六頁 二六〇円 (東京創元社)
- \*徳川禁令考 前集第一 石井良助校訂 A 5 三二二頁 一五〇〇円 (創文社)
- \*藩法集 1 岡山藩 上 藩法研究会 A 5 七八一頁 二〇〇〇円 (創文社)
- \*イギリス初期重商主義研究 渡辺源次郎著 A 5 二八二頁 五三〇円 (未来社)
- \*古代社会経済史—古代農業事情— マックス・ウェーバー著 渡辺金一、弓削達